６－４　実践協力校における授業実践
事例④　中学校　３年生社会科［公民的分野］

Ⅰ　単元計画

１．単元名　中学校第３学年　社会科［公民的分野］「地方自治と住民の参加」

２．単元の目標

①地方自治の基本的な考え方や政治のしくみを理解する。

②住民の権利や義務に関連させ、地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識に気づく。

３．単元の指導計画（６時間扱い）

	ねらい（◇）・学習内容（◆）
1	◇地域が抱える課題に気づき、住民参加による地方自治の意義について考える。 ◆教科書の本文や資料から地方自治の意義や地域の課題についてまとめる。
2	◇地方公共団体の仕事について、具体例を通して理解を深める。 ◆教科書の本文や資料から地方公共団体の仕事について具体例を通じてまとめる。
3	◇住民がもつさまざまな権利とその意義を理解し、住民の自治意識を高めることの大切さに気付く。 ◆自分たちが身近な地域から参加できる、地域づくりの活動を考える。
4	◇地域の自立に関わる取組みとその課題について理解し、今後の新しい取組みを考える。 ◆地域でのさまざまな取組みを調べ、まとめる。
5 本 時	◇スタジアム建設を通して、身近な地域の現状をとらえ、地域の活性化のためにはスタジアムをどこに整備したらよいのか、先行事例を活用して考える。 ◆先行事例からスタジアム建設の候補地を選び、どのようにプレゼンテーションを行うのかを考える。
6	◇新スタジアムの整備を通じて、どのようなまちづくりをしていくのかを考える。 ◆班ごとにプレゼンテーションを行い、候補地を決定する。 設置されたスタジアムをどのようにまちづくりにいかしていくのかを考える。

Ⅱ　本時の様子

１．本時の目標　○スタジアム建設を通して、身近な地域の現状をとらえ、地域の活性化のためにはスタジアムをどこに整備したらよいのか、先行事例を活用して考える。（5/6）

２．本時の展開

「政治的教養を育む教育」で身に付けさせたい力の視点

過程	学習活動（活動の流れ）	ポイントになる学びのプロセス
導入	●課題提示 **「湘南ベルマーレが使用する２万人規模の観客が入るサッカー専用新スタジアムを、候補地のうちのどこに設置すると平塚市が活性化するだろうか」** ＊平塚市内の候補地を検討し、新スタジアムをどこに設置するのかを考える。	・自分の身の周りのできごとに関心をもつ 住民として、平塚市に関わる本時の課題に関心がめばえたか。（関心・意欲・態度）
展開	●先行事例（沖縄・UEFA・日本サッカー協会など）から立地条件を考える。（個人→グループ） ＊湘南ベルマーレの場合にはどのような条件が考えられるのか。	「平塚市の活性化」という視点を入れて、平塚市内の候補地を検討しようとしているか。（思考・判断・表現）

	（出てこない場合、新聞記事から条件を補足する） ●クラスで、立地条件を決定する。 ●地形図を使ってスタジアムの候補地を確認し、立地条件から候補地を決める（個人→グループ） ＊「平塚市の活性化」という視点を入れた発表になるように考える。 ●グループでどのようにプレゼンをするのかを考える。	さまざまな立地条件をもとに候補地のメリット・デメリットを考えているか。　（思考・判断・表現） ・課題について考える 根拠に基づいて自分の考えを持ち、表明できる 他者の意見を聞き、自分の意見と比較して考えている グループ内で妥当な合意形成がなされている
中間発表 **次回の確認**	●グループでの中間発表を簡単に行う ＊他のグループの意見を発表の参考にする。 ●次回、班ごとにプレゼンテーションを行うことを確認する。	**目指す子どもの姿** ・新スタジアムの建設と市の活性化を自分のこととしてとらえ、複数の資料を根拠に自分の考えをつくり、他者との話し合いにより、自分の考えをもつ姿。

Ⅲ　研究協議



１．自評

○授業実践にあたり、様々なテーマを検討したが、生徒に身近で関心をもってもらいやすいテーマを設定したいと考えた。

○スタジアム候補地の選択肢として、ライバルである別の市に位置する候補地をあえて設定することで、市内に候補地を置く利点を生徒から引き出せると思った。しかし、地理的分野に偏った授業展開になってしまった。生徒たちには、コスト面などを含め、もう少し多面的・多角的に考えを深めてほしかった。

２．研究協議のテーマ

①生徒が「自分のこと」として関心をもつための手法について

②「市の活性化」について話合い、生徒が合意形成に至るための手立てとは

３．成果と課題

成果・地域の現実的な話題を教材化することは、生徒自身が地域の身近な問題について「自分のこと」としてとらえ考えるためには、有効であることが確認された。

・当事者意識をもって考えやすく、論点が絞りやすいテーマを設定すること、そして、生徒自身が、合意形成に至ろうとする過程や努力が大切だと価値づける体験が重要であることが確認された。

課題・行政、商店街、サッカーチーム、観戦者など、さまざまな立場からの見方をふまえつつも「市の活性化」のための話合いという目的を明確にしないと、論点がずれてしまう。

・単元のゴールをどこに置くかを明確にしないと、話し合いや合意形成には、必然性が薄まってしまう。

Ⅳ　実践協力校での授業実践を基にした指導事例

H29-4　中学校　３年生社会科[公民的分野]
「地方自治　地域の活性化について考えよう」

【単元目標】

・地方自治の意義について理解し、住民の権利や義務に関連させて、地域の課題（ここでは、「新たなサッカースタジアムの建設候補地をどこにすれば、市の活性化につながるか」）について「自分のこと」としてとらえ、様々な資料や他者の意見を参考に、自分の意見を再構築して、地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識に気付く。

【目指す子どもの姿】

・地域の課題（ここでは、新スタジアムの建設と市の活性化）を自分のこととしてとらえ、複数の資料を根拠に自分の考えをつくり、他者との話し合いにより、自分の考えをもつ姿。

１　本単元の流れと「政治的教養を育む学びのプロセス」との関係

学　習　活　動（全６時間）	ポイントになる学びのプロセス
住民参加による地方自治の意義について考える③ ・地方自治の意義や地方公共団体の仕事・地方財政について知る S：暮らしやすい地域をつくるには、住民自身の判断や決定が重要だね。 S：地方自治のしくみはどうなっているのかな？	
地方自治体は、どのような課題を抱えているのだろうか① ・地方自治体の抱える様々な課題について理解する T：私たちの住んでいる市には、どのような課題があるのでしょうか？ S：暮らしに関わるさまざまな行政サービスのためには財源が必要だね。 S：市の夏祭りに、今まで以上に観光客が来てくれるといいのに。 S：企業の工場が撤退してしまったから、新たな雇用先ができないかな。	ポイント1 自分の身の周りのできごとに関心をもつ
スタジアム候補地を考えよう① ・スタジアム建設候補地を議論することを通して地域の活性化を考える S：駅から近い方が市外の人が来やすいし、商店街で買い物をしてくれるよ。 S：住宅地に近いと、住民にとっては騒音にならないかしら。 S：市の財政を考えると、工場や運動公園の跡地を活用するほうがいい。 S：運動公園がなくなると、地域の子ども達の遊び場がなくなってしまうよ。 S：スタジアムができることは、いいことばかりじゃないと思う。	ポイント2 課題について考える
スタジアム候補地をプレゼンテーションしよう① ・班で話し合ったスタジアム候補地を発表することで地域の活性化についてアピールしたのち、「未来の市の姿」について自分の意見を構築する。 T：スタジアム候補地について議論したことをヒントに「市の課題」と将来の「市の活性化」について、改めて考えてみましょう。 S：施設は、近隣住民の理解を十分に得てから進めるべきだと思う。 S：スタジアムに来た人達へ、キャンプ場や夏祭り等、市の魅力を知ってもらって、また観光に来てもらえるように、発信しなくちゃ。	ポイント3 さまざまな考えから、自分の考えを構築する

2　政治的教養を育むポイント

ポイント1

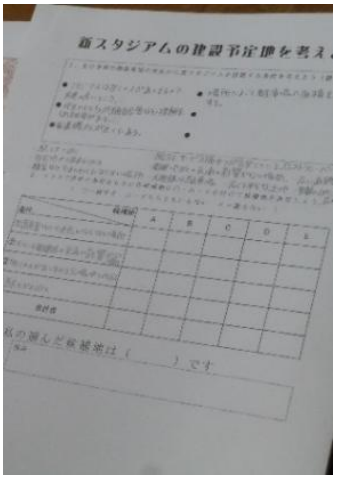
地域の教材を積極的に活用しましょう。

地方自治の学習では、地域の情報に関心をもたせることが大切です。授業のはじめに１分間スピーチタイムを設定し、新聞の地域面や公共機関が発行している出版物、小学校で配付された副教材などから、自分が興味をもったことを話す場面の設定があると、授業の展開がスムーズになります。

さらに、地域の実際にある教材を積極的に活用することで、生徒の関心が高まります。事例では、サッカースタジアムの建設候補地が取り上げられていますが、市町村合併問題や、条例の制定に関わる住民投票など、地域の実態に合った効果的な教材を設定することが大切です。

ポイント2

生徒の多様な意見を引き出す工夫をしましょう。



地域に根ざしたテーマや、時事的なテーマを扱う場合には、生徒に提示する資料の選定が重要です。論点を明確にすることは大前提であり、さらに多様な思考を引き出せるような資料であることが望ましいでしょう。

本事例では、スタジアムを建設した他の自治体の先行例の資料を参考にして、立地条件を生徒自身がいくつも提示していました。さらに、地形図を活用することにより、スタジアムの候補地としてのさまざまな特徴を読み取ることが可能となり、結果として、生徒の多様な意見を引き出すことにつながりました。



また、話合い活動では、単なる個人の意見表明で終わらない工夫が必要です。

本事例では、「スタジアム候補地を住民代表としてプレゼンテーションする」という設定を設け、地域がより活性化するにはどの候補地がふさわしいかを、意見を出し合いながら合意に至るまで真剣に話し合う生徒の姿が見られました。

ポイント3

単元のゴールを明確にすることで、意見を構築する必然性を高めましょう。

近年、中学生を含めた住民の意見を聞くワークショップやタウンミーティング等を実施する地方自治体が増えています。本事例では、単元のゴールを「自分たちの住んでいる地域の活性化」と明確に設定することで、生徒が自らの意見を構築する必然性を高めていました。この単元をきっかけとして、自分たちの住んでいる地域の抱える課題や将来像について「自分のこと」として考え続け、発信することができる生徒を育てていくことが大切です。